

紡績女子労働者の生活記録運動 —記録創出の過程とサークル集団の動態に注目して—

辻 智子

目次

はじめに—問題意識と本報告の目的・方法—

1. 生活綴方以前：1950-1951 年頃
 2. 生活綴方との出会い：1951-1952 年頃
 3. 生活綴方の取り組み：1952 年
 4. 生活綴方の広がり：1952-1953 年
- まとめ

はじめに—問題意識と本稿の目的・方法—

本稿は、「生活記録とく運動」¹をめぐる議論の前提となる具体的な事実を 1950 年代当時の資料にそくして一定程度明らかにし共有することを主目的とするものである²。

生活記録運動といっても、その内実は多様で一枚岩ではなく、実態に即した議論には少なくとも一定の具体的な実践事例の検討とその積み重ねが求められる。こうした作業は従来、主に社会教育研究の領域で行なわれてきたが、2000 年代以降、歴史研究にもいくつかの取り組みが見られるようになった³。そこでの共通の問題意識は、人びと／社会にとってその実践の経験とは何だったのか、それはどのような意味を持ったのかを考えたいという点にある。本稿もまたそうした問題意識を共有するものである。

膨大な実践と残された記録の中からここでは 1950 年代前半に生活記録実践がどのように生起

したかという局面に焦点化し記録創出の過程に注目する。なぜ人びとは生活記録を求めたのか、そこで生活記録とはどのようなものとしてとらえられたのか。その際、その人びとの生活や労働のありようへの着目を重視したい。個別の実践について、それがどのような文脈で始まったのか、マクロな社会的・時代的文脈に加え⁴、生活・労働・集団やサークルの状況といったミクロな文脈からの検討を試みたい。

ここで紹介するのは、紡織工場労働者の文化サークル活動から始まった生活記録実践、具体的には、三重県四日市市にあった東亜紡織株式会社泊工場で労働組合文化活動の展開から生活記録（実際には綴方ないし生活綴方と呼ばれたため以下、生活綴方に統一）への取り組みが芽生えてゆく過程である。この実践は 1950 年代半ば以降 60 年間にも及ぶ長いサークルの歴史を持つが⁵、ここではそのごく初期の一部、1950 年～1953 年頃に限定し、それをさらに細かく時期区分して展開をたどってゆく（生活綴方以前：1950-1951 年頃／生活綴方との出会い：1951-1952 年頃／生活綴方の取り組み：1952 年／生活綴方の広がり：1952-1953 年）。いつ、どこで、誰が、なぜ、何を、どのように、と記される生活綴方には、自分たちの活動の足跡や文集をどのように創出したのかといったやりとりもまた記録に残される⁶。作品発表の場としてのサークル誌とはやや異なり、生活記録サークルの文集・記録には、それらが生み出される過程も、進行形に近い形で記されうるという特徴がある。記録の読解・解釈には、書き手や記録創出の文脈に関する一定の留意が不可欠であるが、そうはいっても、その実践がどのように生まれ展開したのかという事実をより多く伝えうる点で生活記録の資料は貴重であろう。

¹ 戦後文化運動合同研究会（第 7 回・2013 年、第 8 回・2014 年）セッション表題（中谷いずみ「生活記録とく運動——シンポジウムの報告——はじめに」東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante』No.16、2014 年、および水溜真由美「「生活記録とく運動」2」趣旨説明——50 年代文化運動の中の生活記録運動の位置」本誌所収）。

² 「生活記録運動」という言葉がいつ頃から何を指して使用されるようになったのかという点については、さしあたり拙稿「榊原報告・東村報告へのコメント」（同上）を参照のこと。なおそこにおいて「生活記録運動」の語の初出を 1954 年 5 月の日本青年団協議会（日青協）定期大会文書と示唆したが、その後の資料探索により 1952 年の『新女性』10 月号紙上と訂正する。とはいえ「生活記録運動」使用の意味について自覚的ではなかった点については 1954 年 5 月の日青協と同様である（この点は近刊拙書に別途記述予定）。

³ 大門正克「「生活」「いのち」「生存」をめぐる運動」・大串潤児「戦時から戦後へー「社会」を問う人びとー」（いずれも安田常雄編『シリーズ戦後日本の歴史 3 社会を問う人びとー運動の中の個と共同性ー』岩波書店、2012 年所収）、北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』（岩波書店 2014 年）等。

⁴ 紙数の関係上、この点については拙稿「1950 年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動—生活記録運動の系譜に関する考察（2）—」（『神奈川大学心理・教育研究論集』第 29 号、2010 年）等を参照。

⁵ 生活を記録する会『紡績女子工員生活記録集』第 7 巻、第 12 巻の巻末年表（辻作成）参照。

⁶ ちなみにそこには、サークルの外から、いつ、どんな人がやって来て、何を聞いて、どんな資料を持って帰ったか、その後どんな手紙をくれたか、といったようなことも含まれており、当時の「知識人」のみならず現代の研究者や私自身もまた彼／彼女らによって書かれる対象となる。

ここで取り上げる実践は、単行本『母の歴史』（木下順二・鶴見和子編、河出新書、1954年）、『仲間のなかの恋愛』（磯野誠一・木下順二・鶴見和子・日高六郎・丸岡秀子編、河出新書、1956年）の他、復刻文集『紡績女子工員生活記録集（全12巻）』（日本図書センター、2002年・2008年）、中心的存在だったメンバーの手記『ガリ切りの記—生活記録運動と四日市公害—』（澤井余志郎、影書房、2012年）によって知られている⁷。本稿では、これら刊行物に記されている事柄を骨組みとしつつも、これまで紹介されてこなかった資料・個人記録⁸、特に泊工場の労働組合関係資料を主に用いて⁹、実践を促し支えたミクロな文脈を明らかにしたい。

1. 生活綴方以前：1950-1951年頃

紡織工場での生活綴方は労働組合文化活動を基盤に始まってゆくことから、まずはそこに着目し、生活綴方を摂取／受容する前提条件を見よう。

（1）労働組合機関誌

東亜紡織株式会社泊工場で労働組合が結成されたのは1946（昭和21）年10月であった。1948（昭和23）年、労組機関誌『わかくさ』が創刊される。そこにおいて労働組合とは、「日本の民主化のための義務」を持つと記され、日常的な活動を通じて組合員一人ひとりを民主化していく「民主主義の学校」としての役目と、「外部」への働きかけを通じて社会の民主化を促進していく役割からなると意味づけられていた。機関誌は、労働者教育を担ったが、同時にそれは組合員の文芸作品発表の場にもなっていた。随想、川柳、和歌、俳句、詩、小説など多数の投稿が見られる。内容は、花や虫などの自然、故郷の山河、懐かしい家族を詠ったものが多い。なかには戦後の女性や青年のあるべき姿を論じるものもあったが、概して抽象的・観念的なものであった¹⁰。

⁷ その他多数の関連著作、このサークルを取り上げた新聞記事および関連研究については『紡績女子工員生活記録集』第12巻末一覧（作成者・辻）参照。なお直近の新聞記事に2014年10月5日付『毎日新聞』の「ストーリー 母と違う生き方模索—戦後の女子紡績工生活記録」（1面・4面全面記事）がある（記者・石塚孝志）。

⁸ 日記・ノート、聴きとり（インタビュー）。

⁹ 労働組合関係資料は澤井余志郎さんからご提供いただいたものである。

¹⁰ 例えば次のようなものである。「私達の愛する祖国日本は敗戦と云うみじめな結果によって自由を與えられた事を忘れるべきではないと思います。男女共に尊重し合い、理解しあって正しい、責任ある青年の自由を真剣に探究し、平和日本の為、文化国家建設の為に今こそ青年の熱と意気を誠を捧げて進まねばならないと思います」（『わかくさ』

ところが1950（昭和25）年を境に変化を見せる。その象徴が機関誌の表紙絵である（図表1）。8号（1950年7月）以降、勇ましい労働者の姿が前面に打ち出され、その力強さやたくましさを強くアピールするものとなっている。連動してその内容も労働運動の必要性や労働者文化樹立の意義を訴えるものが目立つようになる。そして、その生活の写実的な描写や労働者階級としての闘志の表現に、機関誌編集部から高い評価が付されてゆく。例えば、「私達の生活思想感情の中よりうまれてきたもの、いわゆるプロレタリア文学的な作品」としてほめたたえられたのは次のような詩であった¹¹。

母の顔が浮かんで来た

突然

老いている……

この間 むりをしない様に

と書いてよこした

けれども私は自分の意志を

はっきり書いてやった

本当に私は家を離れても

私は自分の考に生きようと思っている

しかし家の生活を

少しでも助けなければならない

作物の売れない不景気な農村

現金の収入のない私の家でも

少しでも現金が入るように

私達の金をあてにしている

それが千円足らずとは！

苦しさの為に何も云えない

どうしても手にとらなくてはならない

自分の生活の為ばかりでなく

農村の経済をも豊かにする為に

闘争意欲が

知らず知らずの中にますます強まって行く

プロレタリア詩集を開いて

読んで行くうちに

感動のあまりにじみ出る涙を

創刊号、1948年11月、「女性の声」欄より）。

¹¹ 「今こそ私達は、私達働く者の力により、より健全な民衆の文化を創り上げねばなりません。私達が働く者の文化を創り上げることも、今時の賃上闘争においても、私達労働者を過去のみじめな、暗い、貧しい生活におとし入れようとする資本主義への叫びであり、又再び立ちかえろうとしているファシズムへの戦いででもあります。（略）作品は（略）私達の生活の中から生まれたものでなくてはなりません」（編集後記『わかくさ』8号、1950年7月）。

どうする事も出来なかった¹²

「青年」「女性」が「労働者」「働く者」に置き換えられ、貧しさからの解放を求める闘いが強調され、文化とは「労働者文化」「民衆文化」であるべきだとされた。『わかくさ』8号（1950年7月）には、当時労組文化部長だった澤井余志郎が書いた「労文アピール」（「われわれは美しい社会をつくる。／われわれは不正をただす。／われわれは幸せのために闘う。」）が掲載されている。澤井は後に『文化年鑑 1949年』（日本民主主義文化連盟編、資料社、1949年2月）を参考に「文化サークル綱領」を書いたことから、このアピールも同書掲載の日本青年共産同盟アピール、「一、われわれは美しい社会を作る／二、われわれは不正をただす／三、われわれは女性を尊重する／四、われわれは世界平和と民族独立のためにたたかう」¹³を模したと推測される。澤井は党员ではなかったが、日本共産党がリードしていた労働者の文化活動やプロレタリア文学に学ぼうと考えていた。

このように1950（昭和25）年を明確な転換点として、「穏健な」労働組合のなかに「プロレタリア」「働く者」「労働者」という言葉を積極的にとらえてゆく状況が生み出された。プロレタリア文学への傾倒が大っぴらに表明され、それを先進的にとらえる雰囲気もあった。労組機関誌は「プロレタリア文学的な作品」を要求し、それに応えようとする女性労働者たちも存在していた。

（2）労働組合文化サークル活動

並行して1950（昭和25）年には後に生活綴方へと展開する文化サークル活動が始まっている。労働組合文化部は、1950（昭和25）年1月の『わかくさ』6号紙上で文化サークル結成を呼びかけた。半年の間に映画・文学・音楽・演劇の労組文化サークル（以下、労文サークル）が結成されたという。これら労文サークルは活動成果発表の場として文化祭を開催した。演劇サークルは勤務形態別に小グループを作り『シンデレラ姫』『リヤ王』『虫の世界』などの演目に取り組み、音楽サークルは近隣の小学校教師を指導者に学校で教わった歌の二部・三部合唱を行った。映画サークルは移動映画上映会や幻燈上映を行なった。この文化祭は大いに盛り上がり、労文サークルには多数の従業員がかかわったという¹⁴。

他方、会社はこれに対抗してか1950（昭和25）年11月、「泊工場クラブ（東亜泊クラブ）」を結成する。労使一体となって構成されるこのクラブは、総務部（庶務、会計）、文芸部（演芸班、音楽班、図書班）、娯楽部（麻雀班、魚釣班、囲碁将棋班）、体育部（野球班、庭球班、排球班、卓球班、陸上競技班、弓道班、角力班、バトミントン班、ソフトボール班）から成った¹⁵。従業員の中には泊工場クラブと労文サークルを混同する者もあり、労文サークル解消の声も聞かれたという¹⁶。また、労文サークルの演劇で「労働者」と「資本家」の対立や「反戦平和の旗をふる」ものが登場することに対し「第二組合的な性格をおびており好ましくない」との批判も寄せられた。労文サークル活動をめぐって一定の緊張関係が存在していた。

労文サークルの中心的存在だった澤井は当時22歳、静岡県立浜松工業学校紡織科卒業後¹⁷、1945（昭和20）年4月に16歳で四日市の陸軍製絨支廠に就職した（戦後、東亜紡織株式会社へ払い下げ）。その澤井の労組文化活動に大きな影響を与えたのは訓覇也男（くるべまたお）だった。訓覇は澤井より10歳年長で同じ東亜紡織の楠工場（三重郡楠町）で労務課職員・寄宿舎（寮）教務主任をしていた。寮の女性たちと文化サークル活動を行い¹⁸、そのメンバー米倉良子の作文「竹の子会」は労働省婦人少年局「働く少年少女の作文募集」で労働大臣賞を受賞していた¹⁹。

で労文サークルにかかわった（澤井余志郎「ノロノロと歩んできたなかまたち」木下・鶴見編、前掲1954年、136、139-140頁）。

¹⁵ 澤井余志郎の個人ノートより。幹事・会計監査および担当者（班長・リーダー）はすべて管理職を含む男性。

¹⁶ 『わかくさ』10号、1950年12月。

¹⁷ 高麗恵「沢井余志郎さんに聞いたこと①戦後の実像」『季刊 象』創刊号、1988年10月。

¹⁸ 訓覇也男は後に訓覇は労務課長昇進後、会社の意に反するとして解雇を言い渡されたが、労組幹部が「非組合員だから反対しない」とするなか女性労働者たちがストライキを決行し解雇が撤回されている。訓覇は女性労働者たちを説得し半年後に自己退社。その後、四日市市教育委員会事務局などを勤務した後、職員組合から請われて1963（昭和38）年四日市市議に立候補・当選、4期市議を務め、議長を最後に引退。2000（平成12）年には、「生活を記録する会」の四日市での「つどい」（後述）にも参加するなど澤井たちとの交流は長く続いた。2004（平成16）年、逝去（生活を記録する会『通信』2004年7月1日）。なお訓覇の長兄は東本願寺改革派リーダーで総務総長（澤井余志郎「生活記録運動と公害の記録運動」生活を記録する会『明日を紡ぐ「紡績女工」から、母、祖母への生活記録と四日市公害を記録する運動』その3、2008年4月1日）。

¹⁹ 米倉良子「竹の子会」『丘の木』No.5、東亜紡織文芸部、1951年9月10日（ガリ版刷り数頁の文集、思想の科学研

¹² 志賀はるみ「生活の中から」『わかくさ』8号、1950年7月。

¹³ 日本民主主義文化連盟編『文化年鑑 1949年』資料社、1949年、324頁。

¹⁴ 当時の泊工場労働者約600人の半数以上が何らかの形

楠工場のくるべさんの所へもたびたび訪ずれていた。その頃、なにかのきっかけで、プロレタリア文学なるものを知り、小林多喜二、徳永直、佐多稲子、などの小説を読み、感動した。社会主義なるものに興味をもつようになった。くるべさんの社宅に行ったとき、棚から戦前の非合法雑誌『戦旗』をとりだして見せてくれた。「文化運動をしていると、社会主義や共産党にかぶれてくる。会社が神経をとがらせているから、その方面の本は部屋の本棚に出して置くな。その代わりに反共の本を置いとけ…」と言ったので、ベストセラーになっていた小泉信三『共産主義批判の常識』新潮社発行を買ってきて置いた。中味はまったく見ていない。²⁰

(3) 10代半ばの女子労働者たち

澤井ら男性青年労働者の呼びかけに応えたのは、どのような女性たちだったのだろうか。

周知の通り繊維産業の労働者は女性が多数を占める。しかし、女子工員は5等（日給月給制）とされ、仕事内容にも給与にも明確な男女の格差があった。仕事上の必要から必ず行なわれる機械の油差しと修理はすべて男子工員の仕事だったことから、女子工員は男子工員に「頭を下げて」頼まねばならず、「今年入ったばかりの若いボンボンの男性に頭を下げる」ことになった。「男は女を見下ろし、女は男に頭を下げる」のは、「男性は女性を踏み台にして出世していく」繊維工場の構図を象徴するものと違和感を呈する者もいた。

1日8時間労働、深夜勤務や時間外勤務も時折あったという。勤務は、交替番（甲班／乙班）、昼専（8時～17時15分）に分かれ、交代番は、早番（5時～13時45分）と後番（13時45分～22時30分）が班ごとに隔週で交替した。泊工場従業員数は1,404人（1953年末時点）、うち寮生活者は866人（61.7%）であった。女性は全体の76.4%（1,072人）で、寮生活者はそのうち755人（女性全体の70.4%、寄宿舍居住者に占める女性割合87.2%）²¹であった（図表3）。

工場での生活について、その労働の過酷さを語る者もいるが、他方で「そんなにきついと思わな

かった」という者もあり、農村生活に比べれば仕事は相対的に楽なものと受けとめられていた。工場敷地内に、寮・病院（入院可能）・運動場が設置され、従業員慰安旅行・盆踊り・運動会が盛大に行なわれていた（図表2）。寮は勤務形態ごとに数人～十数人の相部屋で、大食堂と大浴場があった。蛇口をひねるとお湯が出てくる生活に感激したという声もある。日曜日・電休日・正月・盆が休日だったが、日々の自由時間（早番は13時45分終業後、後番は主に午前中、昼専は夜）には、幻燈・映画、講話・講演会が行なわれスポーツやレクリエーションを楽しむこともできた。電車で市街地へ出かけて映画を観たり外食をしたり、うたごえやダンスに参加してくる者もいた。「時間はずいぶんあった。いろいろやろうと思えばできた」とも言う。

労文サークルに参加したのは比較的年齢の若い者たちで、新制中学校（1947年4月1日発足）を卒業後に入社した当時16～17歳の寮生活者が中心だった。「働きながら学ぶ」のを魅力に感じて入社した者も少なくなく、学ぶ意欲や向上心は概して高かった。そんな彼女たちにとって当時の労組は刺激的な存在だった。後年のインタビューで伊藤常子は、労働組合だけでなく世の中の動きや社会的な動きが「民主的」な方向へと進めてゆく勢いのある時代で戦争を放棄し平和憲法でやっていく勢いに日本全体があふれていた時代だったこと、当時の労組が加盟していた全国組織も平和四原則を掲げて闘う総評²²と行動を共にして意気盛んだったこと、そのため「自然な成り行き」で関心を持ち魅力的でとても面白かったことを語っている²³。ここで興味深いのは「勉強をしたかった」ので労組に入って行ったという点である。彼女たちにとって労働組合は、社会との結節点であると同時に自分が成長する場、自分を成長させてくれる場でもあったと考えられていたのである。

実際、彼女たちは労組の活動に積極的に参加した。職場代議員をつとめ²⁴、婦人部・文化部で役

研究会編・発行『芽』1巻1号、1953年1月所収）。

²⁰ 澤井余志郎「生活記録運動と公害の記録運動」生活を記録する会『明日を紡ぐ 「紡績女工」から、母、祖母への生活記録と四日市公害を記録する運動』その3、2008年4月1日。

²¹ 泊工場編・発行『泊工場新聞』1953年12月20日。

²² 東亜繊維の労働組合は全国繊維労働者同盟（以下、全織同盟）に加盟。全織同盟は当時総評加盟（1951～1953年）、1953（昭和28）年11月に脱退決定。

²³ 伊藤（登内）常子インタビュー、1994年10月16日。

²⁴ 代議員が選出される職場は泊の場合以下の通り。カッコ内は代議員数・女性代議員数。織布（6、うち女2）、整理（4、うち女2）、紡績（6、うち女1）、洗毛（2、女0）、反毛（1、女0）、染毛（1、女0）、企画（1、女0）、庶・倉（1、女0）、寄宿（1、女0）、電・営（1、女0）、医局（1、女0）、炊事（1、女0）、試験（1、女0）、事務（1、女0）、撰別（1、女0）、警備（1、女0）、気缶（1、女0）、勤労（1、女0）（澤井日誌より、性別は名前より推定）。

員も担った。女性が多数なのにもかかわらず圧倒的に男性主導で進められる労組のなかで²⁵、彼女たちが「主体的に」活動できる可能性があったのは職場代議員と婦人部・文化部だけだったともいえる。婦人部（婦人対策部）は女性のみで運営され、文化部（文教部）とそこに属する労文サークルは青年層と女性が多かった。

また労組の他に寮の自治会も彼女たちの活動の場であった。寮自治会が担うのは、部屋の割当の決定（寮自治会規則第十一条）、休日前日の就寝時刻及び休日の起床時刻の決定や帰社時刻（第十五条）、諸行事（第十六条）だが、実際には自治会機関誌『つくし』の発行、壁新聞作成、誕生日会やクリスマス会、盆踊りやスポーツなどのレクリエーション、寮の増築や閉鎖、門限、外泊書、門札、盗難など諸問題に関する意見のとりまとめや会社への申し入れなど多岐に渡った²⁶。寮は男女別であり、女子寮自治会は女子だけで行われた。

積極的に女性たちがこうした活動へ入っていったのには学園をめぐる次のような事情もかかっていた。学園とは、工場付設の高等実務学校²⁷で、東亜紡織株式会社が1948（昭和23）年4月に開校したものである（泊・楠の2工場）。そこでは交替勤務の時間に合わせた授業（9:00～11:00／14:30～16:30／17:00～19:00）が行なわれた。三年課程で学費は会社持ち、教材費などのみ学生が自費負担した。授業科目は、国語・社会・算数・音楽・体育・保健衛生・洋裁・和裁・料理・茶道・華道・礼儀作法で、修学旅行も行なわれた。この学園に対して、労文サークル参加者たちは、国語や社会の授業への不満と失望の声を表明している。これら教科の教師は労務課職員や寄宿舎の舎監（寮母）が務めたことから、彼女たちにとっては「有り合わせの先生」と見えた。そのため当初は「仕事が終わると、これから学校で勉強だと、意気込んで行った」人たちも、しだいにその意欲を失ってい

ったという。そもそも学園を設置した会社の目的は、「健全にして円満、明朗な自立的家庭人」の育成であり²⁸、「嫁入り修業」以外の「勉強」はもとより真剣に考えられてはいなかった。向学心と社会的関心を呼び起こされていた彼女たちにしてみれば、このような学園には到底満足できなかっただろうことが想像される。

2. 生活綴方との出会い：1951-1952年頃

では次に生活綴方が労組文化活動に持ち込まれてくる過程とその受容の経過を見よう。

（1）文化サークルの行き詰まりと子どもたちの生活綴方

労文サークルは、1951（昭和26）年後半～1952（昭和27）年初頭、壁にぶつかったという²⁹。例えば、文学サークルでは、7人1グループで回覧ノート『日々の歩み』、共同日記への取り組みを始めたが、しだいに「ただなにかを書いているだけ」「なにを書いたらいいのかわからない」という状態になり、なかなか書くことができなくなってしまっていた。また、その文集に対して楠工場の訓覇や米倉から手厳しい批判も受けた。

澤井が子どもたちの生活綴方に会ったのはこの頃だった。そしてその作品を機関紙『わかくさ』紙上で紹介し³⁰、『山びこ学校』（無着成恭編、青銅社、1951年2月発行）を複数冊購入して皆に回覧した。澤井は、「この子供たちの作文は、只口先だけのものではなくて、生活の中から生まれたものであり、この点“理論と実践の統一”が最大の眼目である自分たちにとって大いに学ばなければならぬ点であろう」と述べた³¹。また、労組結成5周年記念特集では『生活する教室』³²から「ひとりの喜びが／みんなの喜びとなり／ひとりの悲しみが／みんなの悲しみとなる³³」を引用紹介し

²⁵ 1949（昭和24）年度の労組幹部は、役員14人のうち13人が男性、1人が女性（婦人対策部長）。当時の泊工場の労組組織体制は次の通り。組合長・副組合長・会計監査・常任理事、各専門部（1.統制部、2.渉外宣伝部、3.会計部、4.教育部、5.文化部、6.調査部、7.運動部、8.厚生部、9.青年対策部、10.婦人対策部、11.生産対策部）。各専門部は部長1名と委員若干名（主に男性）によって構成された（「東亜紡織株式会社泊工場労働組合規約」東亜紡織泊工場労働組合文化部発行『わかくさ』vo.5、1949年12月）。この他に、工場運営委員会、賞罰審査委員会という組織があり、常任理事若干名がこれを兼務した（東亜紡織泊工場労働組合編・発行『わかくさ』vol.3、1949年4月）。

²⁶ 金子栄子「思い出のまゝに」前掲『つくし』1957年12月。

²⁷ 法律上は各種学校。通称「学園」。

²⁸ 東亜紡織株式会社社史編纂室『東亜紡織70年史』東亜紡織株式会社、1993年、159頁。

²⁹ 澤井余志郎「ノロノロと歩んできたなかまたち」木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出書房、1954年、136、139-140頁。

³⁰ 「戦争と子供」特集として江口俊一「父の思い出」を掲載（『わかくさ』13号、1951年8月10日）、図書紹介として豊田正子『綴方教室』、書評紹介として無着成恭『山びこ学校』（『わかくさ』14号、1951年10月29日）、長田新編『原爆の子』（岩波書店、1951年）、さがわみちお編『大関松三郎詩集 山芋』（百合出版、1951年2月10日）（『わかくさ』16号、1951年12月）を掲載している。

³¹ 澤井余志郎「山びこ学校讃」『わかくさ』14号、1951年10月29日。

³² 鈴木道太『生活する教室—北方教師の記録』東洋書館、1951年6月。

³³ 澤井余志郎「組合は脚を持っている」『わかくさ』15号、

た。

これに対し労文サークルメンバーの反応は、当初、「どこがいいのかわからない」といった具合だった。1951（昭和 26）年 12 月頃、文学サークル部員の間で「観念的だナエ」という言葉が流行し³⁴、「いつも力を合わせて行こう。かげでこそこししないで行こう。いいことを進んで実行しよう。働くことが一番すきになろう。なんでも何故？と考える人になろう。いつでも、もっといい方法がないか、探そう」（『山びこ学校』の「六つの誓い」）が合い言葉になっていった。そして「観念的だナエ」というだけですましてしまえば、尚[観]念的じゃないか」と声があがり、生活綴方について文学サークルを中心に話しあいの場が開かれることとなり³⁵、「労文山びこ学校」と名づけられた。

（2）「労文山びこ学校」

『山びこ学校』とは、山形県の山村の中学生が生活を綴方や詩に綴るとともに、そこにある問題を調べ考えあって解決の道を探ろうという学校教育実践の記録である。この本に対して泊工場の労文サークルのメンバーたちには「なんだ、こんなことなら自分たちにだって書ける」という身近があったという。世代もほぼ同じ、境遇や生育環境も似ており、文章表現の力量にも親近感があった。他方、その内容が貧乏であったことから深入りしたくない気持ちもあったようだ。自らの貧しさに正面から向き合うことが迫られると思われたからである。1952（昭和 27）年 2 月 15 日、文学サークルメンバーを中心に約 30 人が集まり、初めての「労文山びこ学校」が開催された。うたごえ運動が音楽サークル以外にも広がり、「なかまづくり」「なかま意識」が言われるようになっていた頃だった。

初めての事と、先生がおって指導してくれるのとは違い、みんなで話し合ってゆくつどいにて、これといつだ事はできませんでした

1951 年 11 月 10 日、鈴木（1951）の引用は表紙扉および 154 頁。

³⁴ 『山びこ学校』についての論評が多く発表されて『山びこ学校から何を学ぶか』（須藤克三編、青銅社、1951 年）が出版されたり、『山びこ学校』が映画化されたりした頃である。

³⁵ 『自由な広場』第 1 号、1952 年 7 月 1 日他。『山びこ学校』が「農村の百姓の貧しさをありのままに」書き、「それが嘆くだけでとどまるのではなしに、そういったものをどうしたらいいのかを一緒に考えさせずにはおかない力強さがあった」ことから、「ワシらも、『山びこ学校』にまけんようにやろうや」と生活綴方研究会を始めることになった、と澤井は延べている（前掲澤井、1954）。

が、委員の方でプリントした「山びこ学校」の中の、江口江一さんの綴方“母の死とその後”を声を出して読みあい、いろいろと話し合いました。“話すこと”はなれていないせいか、三十人位集まった中で、シャベったのは、三分ノ一位でしたが、みんな真剣でした。³⁶

2 ヶ月後、4 月 15 日の「労文山びこ学校」では、「各々が自分の家について『山びこ学校』のようにありのまま書いてみよう」という提案がなされた。

「農家はどうして貧しいか」これは四月十五日の山びこ学校でみんなが額に汗を浮かべて討論したことです。自分の家の事ですのでよく話がはずみ、この討論をもっと発展させるために「みんなで綴方を書こうじゃないか」と言う事になり、労文生徒が一生懸命書き始めたのでした。³⁷

皆が家に送金していることをお互いに知ってはいても口に出さずにきたメンバーだったが、この時、初めて皆の前で「私の家は貧乏だ」「私んともそうだ」と言いあうことができたという。人に言えない恥ずかしいこと、隠しておくこととしてあった「私の家」の貧乏を打ち明け、それが自分だけでなかったことを確認したメンバーらは、胸のつかえが溶けてゆくような感じを味わった。その解放感が、「自分たちも書いてみよう」という勢いを生みだした。5 月 5 日、書きあげた 2 人の生活綴方が「労文山びこ学校」で朗読された。他方、書けない人もおり、ガリ切り担当の田中美智子が催促して回ったところ、提出した原稿を返してほしいという人も現れるなど文集作成作業は思うようにはかどらなかった。

小林「原稿おそくなっちゃってごめんね。おねがだから編集しちゃうまでは誰にも見せないでね。恥かしいわ」

「見せないわ。あっ、名前は」

小林「名前書かんといて、な」

「でもね、みんなそう云って恥かしがるのよ、でもやっぱり名前書いた方が責任がもてていいんじゃないかしら」

小林「いやだわ。山びこ学校の人みんな原稿出した？私、原稿出した人しかこの文集

³⁶ 文教部編集班「生活綴方は誰にも書ける」『私の家（活版）』1952 年 9 月。

³⁷ 「この文集ができるまで」『私の家』1952 年 6 月。

見せないようにしたいわ」
原「私ね、綴方書くからね、絶対笑わないで。みんなが笑うんだったら私泣いちゃうわ。山びこ学校の人達が真剣に考えなければ駄目だと思うの」³⁸

ガリ切りも終わった原稿を「どうしてもいやだ」「破いてくれ」と責めたてられた田中は、自分のやってきたことは間違っていたのだろうか、今までの努力は水の泡と帰するのだろうかと思ひ、
「絶対にたえられない、悲しい事だ、泣きたくなかった」と日記に書いた³⁹。

(3) 生活綴方文集『私の家』(文学サークル編、20 編、150 部作成)

1952 (昭和 27) 年 6 月、初めての生活綴方文集『私の家』が完成する。達成感や自分の書いたものに対する誇りと同時に、「私の家」のことを明るみに出すことへの気おくれや心配が入り交じった複雑なものであったという。なお『私の家』は、各所に配布され手元に残部がなくなったことから、同年 9 月、追加分 4 編もあわせて活版で再度作成された (24 編)⁴⁰。うち 22 編が女子労働者によるものである。年齢は 16～19 歳、寄宿舎 21 人・

³⁸ 『私の家 (ガリ版)』1952 年 6 月 (ほぼ同様のものが文教部編集班「生活綴方は誰にも書ける」『私の家 (活版)』1952 年 9 月にも収録)。

³⁹ 田中美智子日記 1952 年 6 月 8 日。また、ある日の「労文山びこ学校」では (おそらく 5 月 15 日)、各自が書いた生活綴方を 30 人ほどが持ち寄ったものの誰もそれを読もうとせず、澤井が隣の尾崎八重子の書いてきたものを取り上げて読んだところ、尾崎はわっと泣き出し、他の人は「うちだけじゃなかった」とホッとしたということがあったという。それから次々に生活綴方が提出されるようになったが、このことから生活綴方は仲間づくりができて、心がひらかれていないと始まらないものだという事を澤井は痛感したという。

⁴⁰ ガリ版で作成した文集を「先生たち」に送った文学サークルのメンバーらは、その返信および 6 月の文集作成に間にあわなかった 4 編 (宮島蓉子、向井久美子、高坂敏子、水谷よし子。表題はいずれも「私の家」) を合わせて 9 月に活版で生活綴方文集『私の家』を作成しなおした。そこには、「なかまの顔」として、執筆者の名前・年齢・出身地などが記されているが、これは無着編『山びこ学校』とさらなる類似性を示している。なお、ガリ版 (1952 年 6 月) と活版 (1952 年 9 月) では、収録された生活綴方の数の相違とともに 1 名、執筆者の名前が異なっている。ガリ版刷りでは「■[判読不能]藤美恵子」となっているものが、活版では「米山もとえ」となっている。どちらが筆者の本当の名前なのかは不明である。また、ガリ版には、山崎志津子「夜」という作品が収録されているが (活版には収録されていない)、これは主語も「彼女は」であり、頁数も 1 頁と新たに付されていることから、文集『私の家』とは別のものと解釈した。

通勤 1 人、寄宿舎 21 人中 20 人が長野県上下伊那郡の出身であった (上伊那郡 14 人、下伊那郡 6 人)。

そこには幼少時代の記憶をもとに家庭環境や家族のこと、戦争のこと、家の田畑と労働力の状況などが主に綴られた。全体的には農村農家の厳しい生活とそれへの嫌悪や反発が表明されているが、同時にそれらに対する割り切れない思いもまた表現されていた。

3. 生活綴方の取り組み：1952 年

最初の生活綴方文集を経て、メンバーたちは次の展開を展望してゆく。

(1) 生活綴方への意欲

文集『私の家』は、彼女たちの中学校時代の教師や友人・家族に加え、全国各地の綴方教師や教育学者らへ送付された。

この原稿を出すとき、みんなが恥かしがりました。ありのままの自分の家を発表するのがどうして恥かしいのでしょうか。原因はどこにあるのでしょうか。まずこの事から、みんなて話しあって行きたいと思います。この文集の中にはその他色々な問題がのこされていると思います。／尚この文集はこれだけにとどまってしまわないで、今後もこれにつづくものを作りたいと思います。／切まで間に合わなかった澤井さんや滝沢さんのような人もありますので⁴¹、それを入れて、各方面の私の家に対する批判や山びこ学校での問題解決の記録を主にした「山びこ学校から何を学ぶか」⁴²的の文集を作ろうじゃないかという声もあがっています。今の中から、書き足りない点や感想を書いて用意しておきましょう。

43

文集への反応が手紙で寄せられ、それを「労文山びこ学校」で読みあい話し合った。そこには次

⁴¹ 6 月 2 日の「労文山びこ学校」では、「みんなの拍手にむかえられて」澤井が書きかけの自分の綴方を読んだとあるが (「この文集ができるまで」『私の家 (ガリ版)』1952 年 6 月)、間にあわず収録されなかった。なお活版 (9 月) にも澤井の生活綴方は収録されていない。

⁴² 須藤克三編『山びこ学校に何を学ぶか』(青銅社、1951 年) を想定したもの。

⁴³ 田中美智子「あとがきにかえて」『私の家 (ガリ版)』1952 年 6 月。また、名前のなかった原稿には、「こちらで調べて書いておきました」「誰もがいやなのを我慢しているのだと思うと、どうしてもそうしなければならなかったのです」とも付記されている。

のような指摘があった。文集『私の家』に書かれた暮らしは、「日本の社会（政治）の大きな問題」であり、「日本国家全体に通ずる」問題であること、したがって、「私の家」の「近代化をはばんでいるもの」、とりわけ「封建的家族主義」という人間関係にもメスを入れて考えていかなければならないこと、働いても働いてもいっこうに暮らしがよくなるという農家には一体どこに原因があるのか、そしてそれをどのように解決してゆくのかは今日の若者に課せられた大きな問題であること（7月2日「労文山びこ学校」）。これを受けてメンバーの一人、志賀はるみは、「農村の封建制、農民のあきらめや、屈従の精神は、長年の間に培われてきたものでありますから、口でいうほど、そう簡単に根こそぎくつがえすことのできない深い深いところに根ざしているのです。私たち農村に生まれ、農村に育ってきたものは、こうして工場という違った社会のつくりの中で生活してみて、ようやくそのことがわかりかけてきたのです」と書いた⁴⁴。

日本作文の会による第一回作文教育全国協議会（岐阜・中津川）が開催されたのは、ちょうどこの頃（1952年8月）である。泊工場の労文サークルからも3名が参加し、生活綴方運動復興の熱気とともに自分たちがやろうとしていることの意義を感じて帰ってきた⁴⁵。

また、文集『私の家』に寄せられた支持や励ましのメッセージには、東亜紡織労働組合連合会（東亜労連）会長・赤坂常之進からの次のようなものもあった。

労働組合の中に、生活綴方が行われ、それを通じて自己の立場を知り日常の生活の中でわれわれ労働者の生活追求と、人間としての、真理を追求して行く事、またそれぞれの自己の立場をはつきりと文字の中に確認しあってゆくことが大切な事である、われわれの生活を向上してゆくことに非常に心強い、いまの労働組合の組合員はみんな、もつと自己の生活を掘り下げて幸福追求への労働者の基礎を造つてゆかねばならない。／私は前述の意味において、文集「私の家」をたのしく読みさせていただきました、皆さんの作文の中に私達

の生活がなんのかざりけなしにうつし出されてある、ヒクツ性がなく、また恥しい事に違いない事を素直に現わしている事のみなさんの気持ちが尊いと思います。⁴⁶

当時の東亜労連は、その後、鶴見和子の泊工場訪問（1952年8月）を仲介した他、生活綴方研究会を開催するなど⁴⁷、生活綴方への取り組みを後押しする姿勢を見せた。

（2）周囲の状況

生活綴方への工場外からの支持や応援に対して、工場内の身近な周囲の反応は必ずしも好意的ではなかった。7月15日「労文山びこ学校」（30人参加）では、寮の部屋ごとの「家についての調査」⁴⁸が提案された。メンバーの賛同を得て、さっそく着手されることとなったが進まなかった。調査着手の経緯は次のようである。

私の家の批評をよみ、感想を云っている中に、送金の問題が出て、これに対する態度が問題になった。沢井さんの提案で、みんなの家庭事情と送金の関係を調査する事になった。出席した人が、各々の部屋を担当する事になり、第一として、家では貴方の送金によってまかなっていますか、いませんか、から始まり、最後に、送金をする本人の態度まで、しらべるのだ。／滝沢さんが云った、文集とは何かかけ離れているようだという事は、今問題にはならないと思う。これが第一段階の研究としての資料になるのだ。又、実践するいみにおいても、責任をもたなければならない点で、良いだろう。こういう進み方が、観念的でない方法だと思う。⁴⁹

ところが、部屋の同僚たちは調査に非協力的だった。そもそも文集『私の家』に対する周囲の反応も冷淡であった。

それから山びこ学校でできた調査の事に

⁴⁶ 赤坂常之進・東亜労連会長、『私の家（活版）』1952年9月。

⁴⁷ 東亜労連第一回生活綴方研究会、1952年11月20-21日。ただしこれは、大阪府岸和田市・山滝小学校での「生活図画・綴方研究会」に東亜労連として参加したということのようである。泊からは3人が参加（『自由な広場』第3号、1952年12月15日）。

⁴⁸ 調査項目は、「家の職業」「家族」「送金しているかどうか」「何故工場へ来たか」「家はどこか」とある（志賀はるみ『私の家』その後『私の家』1952年9月）。

⁴⁹ 田中美智子日記1952年7月15日。

⁴⁴ 志賀はるみ『私の家』その後『私の家』1952年9月

⁴⁵ その様子については、西川祐子「生活綴方」と「生活記録」の出会い——一九五二年八月、中津川」（西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ 鶴見和子文庫との対話・未来への通信』日本図書センター、2009年）も参照。鶴見和子との直接的な出会いもここである。

入りあのこの間聞いた人も居るのだが皆んな家の事書いてみたいと思わない…少しの間しづまりかへっていた。

少し私の聞き出しが悪かったのかも知れないと思ってゐるとyさんがあの私の家って云う文集は貧しい事ばかり書いて有るってね、

あのKさんのなんか昨年家に返った事が書いて有ると云うのに……

自分が帰って来る時に米がなくて青い稲を刈って帰って来るのにまに合せて下さったってね、

ほんとにそんな事が有ったのかしら信じられないわ……

というと今迄洋裁和裁をやって居た人も同感と云わんばかりに、ほんとうの事かしらと云って居た……

あんな事かくなって信じられないわ……

少し腹立たしく感じたがでもね、皆書く前はイヤだ自分の家の事なんか恥ずかしいからと云っていたのよ……でもね貧乏と云う事は自分が悪いのでも父母が悪いのでもない、いくら働いても働いても楽な生活が出来ない現在の社会が悪いのだからと云うので文集を書いたのです……それなのに無理に自分の家を真実以上に良く書く人は有るにしても悪く書く人はないと思うわ……

そう云われて見ればそうかも知れないが私はまだ納得出来ないわと云った顔つき……Tさんはもうそんな話など聞きたくないといわんばかりに床の中に入ってしまうMさんもそんな話より早くこの着物を縫はなくてはと云わんばかりに一心に着物を縫い続ける この人は洋裁和裁が出来たら私はそれで良いのと云う人かも知れない こうなっては話してもむだなことかなと一人早や合点かもしれないがもうそれでやめてしまった⁵⁰(下線、引用者、以下同様)

「綴方教室」(「労文山びこ学校」を改称)への批判的な声も耳に入ってきた。

部屋の人達皆そろって食事をした。私わ早く食べてしまったので皆綴方教室に行くか聞いてやろうと思い、

「綴方教室に行かない？」と聞いた、すると「やらしいでいやだ」

「やらしくないよ、誰でもいいんだに、みんな行こうに」と云った、けれども誰一人として行きたいと云う人がなかった。どうしていやなんだろうと云う事を考えてみた。皆綴方わむづかしいと考えているからでわらないでしょうか。私でも比の前まで上手書こう書こうと頭でひねくって書いていた。今でもそうかも知れない。本当に有った生活を其のまま書いてみると云う事わ本当に良い事でわないでしょうか。もっともっと綴方と云う事を、出て来ない人達にもわかって貰って多くの人達が出席して勉強して行きたいと思います。

51

生活綴方や文集『私の家』は工場内の身近なところほど共感や支持を得にくく、メンバーとそうでない人との間には温度差があった。そこでは農村や農家の問題を共同的に探求する問題意識は容易に共有されなかった。

4. 生活綴方の広がり：1952-1953年

こうした事態が打開されていったのは、寮をめぐる問題への対処において生活綴方が果たした役割が認識されたことからであった。

(1) 寮をめぐる問題

1952(昭和27)年当時、満杯となった寮では、その劣悪な生活環境から寮生の中でトラブルが絶えない状況になっていたという。泊工場従業員数推移で確認すると(図表3)、1950(昭和25)年頃の約600人が1953(昭和28)年末に約1,400人と倍以上にふくれあがっていた⁵²。

労文サークルメンバー田中美智子の日記から寮生どうしのやりとりの概略を以下紹介する。

1952(昭和27)年7月17日、田中が新入生学習の座談会を終えて部屋に帰ると、同僚たちは部屋替え問題で「ケンケンごうごう」としており労組寄宿舎対策部への批判や会社への不満を高めていた。そして、それを「書こう」ということになり実際に何人かが生活綴方を書いた。そのうち古川喜恵子と田中のものが澤井らを経由して労組組合長の手に渡った。それを読んで感激した組合長は「自分の起ち上る時が来た、いざ」とでも思ったか、すぐにそれを工場長の所へ持って行き交渉

⁵¹ 吉沢先「綴方教室」『(平和文集)』1952年10月。

⁵² 1950(昭和25)年の約600人という数字は澤井による。1953(昭和28)年末に約1,400人という数字が会社によって公表されていることから(『泊工場新聞』)、1951～1953年度の3年間、毎年200人以上が新規採用されたものと推測される。

⁵⁰ 金子栄子「一つの部屋の話から」『文学ノート』、日付不詳。

を始めた。工場長は、綴方の一文「工場長は一軒持っているのだから、私達の苦しみなど解らないだろう」に激怒して、「わしと寮生とは地位が違うんだ。そんな事を云ったやつは赤だから、わしが一応会って、もしはっきりしたら、やめてもらおう」と言ったという。これを聞いた田中は心配しながら部屋に帰ってくる。しかし、部屋での次のようなやりとりに、むしろ安心感を覚えた。

[自治会の委員会報告として市川が一引用者補足]「寄宿舍の問題ね。今会社では黒字なんて。それで組合でも賃上げ闘争をするって云ってるし、自治会としてもこんな機会にのりださないと要求出来なくなるって云う意味だね。今日審議されたんだけど。明日。代議員会で承任^{マツ}してもらうんだって」

始めて聞く話なので、みんな市川さんの口もとを見て聞いている。

「それでね。十七じょう^{マツ}だったら八人位が適当だっていう」

「わあ、そうね、そうね」

市川さんがまだ云い終わらぬ中に、八人という言葉を聞いただけでうれしくなってしまった。私はすぐ押入れの数を数えた。十二あるから八人だとすると一人で一つ半使えるわけだ。それだけでもどんなに楽になるだろう。

「でもね。男寄もたてるんでしょ」

「うん、それわね。今会議員^{マツ}[室]に電話がかかって来てね。男寄としては女寄をたてる事に全面的に賛成したって」

「うわーっ、すてき」

「未来の旦那様やもんね。」

「ウフフ」

「一寸、みんなだまれ」

古川さんがよろこんでるみんなをしづませた。市川さんが又話す。

「もし建てるとなったらね。まづ面会室、それに勉強室」

「うわッ」

「結髪室」

「うわッ」

「会議室もいるね。娯楽室もいるだろうし、双葉寮の講堂も明けてほしいし。それに、個人のミシンを置く部屋がほしいわね」

「そうね」

「理想の部屋としては、八じょう^{マツ}で四人がいいだろうって決ったわ」

「うわー。それがいいわ」「いいナ」

大喜びである。市川さんは後につけ加えて、みんなの要求を綴方に書いてほしいと云った。

「書こうにナ、みんな」

「私、この今の部屋の人達が喜んでる様子書こうと」

「あれ、今、私も思っと思ったに」

「ぢゃあ、二人で書こうに。ナッ。書こう」

53

このように日記に書いた田中は、「うなだれ考え込んでいる」澤井と三宅のところに、その日記を持って行って見せた。そして澤井・三宅によって、この日記もまた代議員会で紹介されることになった。田中は、「もしこれが成功したら、これこそ本当の生活綴方ではないだろうか。部屋の人も二、三人書いているから、これをまとめて文集にしたらどうだろうか」⁵⁴、そして「現在、生活綴方による寮建設問題が労資協議会にまで進もうとしている。ねうちのある題材が綴方教室をやる前にでているのである。だから、誰もが生活綴方が、このよいものである事に反対しないだろう」⁵⁵と書いた。

(2) 寮の新設へ

ところで寮自治会でも新年度の第一回総会で1952年度の方針としてこの問題を取り上げることを決定していた。とはいえ、「私達の要求をどこまで受け容れてもらえるか」は「並大抵でない」と懸念してもいた。しかし、1952(昭和27)年8月11日の寮自治会座談会で「苦しみ」「辛さ」を訴える発言が相次ぎ、寄宿舍増築の交渉を会社に対して行うことが決意された。ただし寮自治会は、労働組合とは別組織で会社との交渉の権利を有していなかったことから、労組代議員会にこれを提起し、討議・決議の末、労組が新寮建設の交渉を会社に対して行うこととなった。10月、会社は新寮建設の計画を発表する。「十五畳に十人で十六室」という計画であった。これを労組寄宿舍対策部と寮自治会とで検討し、「雑居生活」から抜け出すためにはもっと一部屋の大きさを小さくするよう要望を連絡会(新寮建設にあたり会社と労組が協議を行う場として設定されたもの)に提出した⁵⁶。

こうした動きと並行して寮についての生活綴方や様々な声が発信され共有される状況が生まれていた。労組機関誌『自由な広場』には匿名の投稿

⁵³ 田中美智子日記 1952年8月11日。

⁵⁴ 田中美智子日記 1952年8月12日。

⁵⁵ 田中美智子日記 1952年8月13日。

⁵⁶ 労組機関紙『自由な広場』第3号、第4号、1952年12月15日、1953年1月24日。

（「したづみの声」欄）が複数寄せられた。投稿「寮を建てて下さい?!」は、女子寮は「十七畳半の部屋に十一人」が押し込められ、押入れも「窮屈で窮屈でならない」が「我慢している」状態であり、結髪室も新たに居住部屋にされる有様で、「私達はもうこれ以上だまって居れません、声を大にして叫ばなくてはならない、寮を建ててください?!寮を建ててください?!」と懇願していた⁵⁷。

個人の日記が文集に掲載され、労組発行機関紙『自由な広場』にも投稿が掲載されて多くの人に読まれる状況が生まれた。そこでの日記や投稿の影響力は、労文サークルのガリ版文集とは比べものにならないほど大きいものだったと想像される。

「勤労のYさんがいったけど、寮が明いていたらもっと新生生を入れるつもりなんだって」

「うハッ、ぶたでもあるまいし。そんなにつまられてたまるか」

みんな机のところにかたまってしまった。喜代ちゃんが腹が立った様に話し出した。

「そうそう、今日主任さんがね、寮は十七畳だから入ろうと思えば十七人入れるだろうっていったわ。私、ごうがわいたから“同じ人間よ”って云ってやった。そうしたら“会社の人は誰でも寮なんて一ぱいつめこんどいたらいいって思っとるぞ”とすましてた」

私は喜代ちゃんの話聞きながら、そんなに新生生を入れる気なら、きっと会社には仕事がふえるんだらうと思った。そしてもうけているだろう、そう云えばこの頃、職場の仕事が忙しくて仕方がない。官廳関係のサージや予備隊の毛布や服地など、どんどん織り上がって出てゆく。

「ねえ、工場長、寮よこせってみんなでストしようか」

誰かが、とんきょうな声を上げたら、みんなうわーと拍手しながら賛成した。ヒロエちゃんが、

「そんな事すると、消防のポンプで水をぶっかけられるよ」

と云ったから、

「いいじゃない、夏だから涼しくていい気持ちだよ」

と云うと、又みんな大笑いになった。喜代ちゃんが、

「工場長には解らないかねえ、こんなに寮がせまいってこと」

と云い出した。もちろん解らないだろう、ちゃんとした住宅で豊かな生活をしている人には押入が一杯で困る事など解るはずがないのだ。⁵⁸

「今の地震でこんなにおそろしいのだから戦争が始まって爆撃に会ったら、どんなに怖ろしいかナー」

誰もねむれない、爆撃に会った君ちゃん、吉川さんが色々の話をしてくれた。災害はいつ来るか解らないが戦争は私たちでさけられると討論している中に誰か面白い事を云い出した。

「一寸一寸、今の地震で工場長も飛び出したらうね」

「もちろん、真先やろ」

「これだけは、さすがの工場長も降参か、ウフフフ」

「天災は誰でも平等ね。寮の問題と反対だわ」こんな話をききながら、ほんとうにそうだと思うと不思議になった。自然はどんなに貧しい人でも、吉田さん[吉田茂首相－引用者補足]でも同じよろこびを与えてくれる。又今の地震でも、貧しいからとか、金持ちだからとかで苦しみを差別しないのだ。その反対に人間の手が加えられ作られて来たものは、そういう訳にはいかない。本がよみたくてもお金がないと買えないし、同じ働いていて給料にうんと大きな差がある。又選挙だって運動資金がないと当選できない状態だ。こんな世の中になったのは、いつ頃だろうか。おそらく大昔の人間の生活にはこんな不平等な事があり得るわけがない、いつ頃から社会に差が生まれたのだろう、歴史を勉強しなければならぬとつくづく感じた。⁵⁹

新寮建設自体は会社の方針で独自に計画されたものとも言えるかもしれないが、労働者たちにしてみれば、この一連の展開自体が生活綴方実践として認識されたようである。そして、これは生活綴方が工場のなかで広く受容され理解され支持される契機となった。書かれたものが読まれ、読んだ人が書き、それが読まれ、また書かれる、という相互的なやりとりが労組機関誌等を媒介として生まれ始めた。そしてそこでは、「民主化」「自治化」という言葉が多用され、「みんな」の力でそれ

⁵⁷ 「寮生の声」B子（『自由な広場』第2号、1952年9月1日）。

⁵⁸ 共仁たつ子「寮と地震」『（平和文集）』1952年10月。筆者仮名。

⁵⁹ 同上。

を良くしてゆくという主張が展開された。

(3) 労働組合の運動方針

この年の秋、労組の婦人部委員会は、今度は「母について書こう」と話しあい、12月に生活綴方「私のお母さん」を募集した⁶⁰。母たちが置かれている農村・農家の状況を書くことを通して社会への問題認識を深めるとともに、将来自分たちはどんな母になりたいか、そのために今の母の生活をありのまま書いて考えようと企図されたものであった（婦人部長・志賀はるみ）。このような展開には次のような要因が関連していると考えられる。①文集『私の家』を通して女性の筆者が自らを重ね合わせるのは母の姿であったこと、②鶴見和子の訪問・交流のなかで「新しい婦人になるための勉強も必要」と指摘され刺激を受けたこと、③また鶴見が石母田正の「母についての手紙—魯迅と許南麒によせて—」⁶¹を読む必要があると言い残し、それを受けて同書を読むメンバーがいたこと⁶²、④楠工場で文集『母・最近の出来事』が作成されていたこと、⑤メンバーの中に新しい時代の女性のあり方について特に強い関心を持つ者がいたこと⁶³。1953（昭和28）年3月、ガリ版刷り文集『私のお母さん』（東亜紡織泊労働組合婦人部）が完成した。41編が収録され文集『私の家』より執筆人数が増えた。労文サークルではなく労組婦人部としての組織的な取り組みになったためと思われる。

1953（昭和28）年4月25日、東亜紡織泊労働組合第八回年次大会では、1952年度の文化部長・澤井が、①生活綴方的実践、②サークルからグループ活動へ（職場グループへの展開）、③機関紙活動、について次のように報告した。

生活綴^{ママ}方を書くことによって、現実をじっと見つめることのできる力をもつことができたり、人の言うことなどを唯単に信ずるのではなくて、このことはほんとうなのか、と

かただしいことなのかとかいった批判力をもつことができるのであって、こういうことは映画『ひめゆりの塔』で学んだ様に、無批判で盲目的であったばかりに大きな悲劇を招いたことの苦い経験があるのであり、こういったことを再びくり返さないためにも、また目の前のことをよく見究めることによってよりよい生活^{ママ}えの原動力となるのであります。こういった事から私たちの生活をよくするための活動は、現実から、又生活から遊離したものではなくて生活に結びついた、生活綴方的実践を言うことで今まで実践をすすめてきました。⁶⁴

この大会に先立って3月に実施された新年度の労組役員選挙では、それまで生活綴方に積極的に取り組んできたメンバーが当選していた（澤井余志郎が副支部長、登内常子が婦人部長、三宅昭夫が文教部長）。これによって泊労働組は新年度（1953年度）の労組活動方針に生活綴方への取り組みを掲げることとなった。活動方針の柱は次の12項目であり、生活綴方は「六、生活向上は、ありのままの生活直視から」に盛り込まれた。

- 一、平和だ — 戦争はごめんだ
- 二、総評強化のために
- 三、賃金値上げ闘争と労働強化について
- 四、賞与闘争
- 五、財政の確立
- 六、生活向上は、ありのままの生活直視から
- 七、サークル活動からグループ活動へ
- 八、青年こそ前身（？）のバックボーン（背骨）
- 九、理想とする母になるために
- 十、私の生活を自由に、そしてよりよく
- 十一、あたりまえの事はあたりまえに
- 十二、よろこびも悲しみも共に

（略）「生活綴方のしごと」というのは、作品を書く事が仕事の全部ではなくて「作品」を活動の中で、皆の話し合いによって、生活についての考え方を探求し、改善していくところに大きな目当てがあります。私達は何時の場合にも、今よりももっと程度の高い生活を営む事を望みます。そのためにも組合活動はなされるのですが、この生活を良くする為に

⁶⁰ 『自由な広場』第3号、1952年12月15日。

⁶¹ 『歴史と民族の発見』所収、東京大学出版会、1952年。

⁶² 石母田は「母についての手紙」のなかで、男性革命家の母や妻たちがもっと着目されるべきであることを指摘している。また自分自身の経験を踏まえて、「私は正しいものに対する認識というものは、思想の進歩的或は保守的傾向によるのではなく、その人の人間性の深さによるものだということ、父は『近代的』な思想を持っていますが、人間性がブルジョア的立身出世主義に毒されているのにたいして、母は『封建的』でも、自分と子供たちの人間性を外部と父の権力からまもるために、精一杯の努力をし、その苦勞と抵抗によって母としての人間性と正しいものへの本能的な理解をふかめてきたのだということを確信するようになりました」とも述べている。

⁶³ 『（平和文集）』1952年10月。

⁶⁴ 『第8回年次大会報告書・議案書』東亜紡織労働組合泊支部、1953年4月25日。

は先ず身近な所から「思い通りにいかないのは何故だろうか」「どこに原因があるのだろうか」と有りのままの姿をじっと見つめて考える、そして話し合う、こういう事が一つの鍵となって次々に色々な問題を解決していくことが出来るのであり、こういった事を私達のくらしに直接つながる組合の中にうまく取り入れてやれば、素晴らしいものになるのです。だから、そういった事の為に皆が先ず見た通り、聞いた通り、思った通り素直に自分のことばで綴り、その中から、どう云う考えを持ち、どう行動しなければならぬかを探求したり、又グループで有りのままのものを、素直に出し合って、色々と話し合う事がなされなければならないのです。⁶⁵

ガリ版文集『私のお母さん』が費用不足で組合員全員の手に渡っていないため再度全員への配布を求める意見が出された。これを受けて労組は、文集『私のお母さん』を発展させ、1953年度は文集『母の歴史』を作成する計画を打ち出した。ガリ版刷りチラシ「母の歴史を書こう」（1953年5～6月作成推定）は次のように呼びかけた⁶⁶。

労働組合婦人部の活動方針として取上げるまでもなく、ここで生産に従事しておられるみなさん（男性は別として）は、母になると云う必然性をもっているんですが、誰でもよい妻に、そしてよい母になろうとして、洋裁したり和裁をしたりしているんですが、こんどそう云うことの他に、現在の母の生ひ立ちや生活をありのままに綴ることによって、よい母にと云うより、われら母なれば、日本の母と云う誇りのもてる母になるために考え合ひ、できることから実践にうつして行こうと云うことになったんです。（略）母についてよく知っておられない方は、お家へ手紙で、生まれた頃のこと、お父さんの結婚されたときのことなどを、問いあわせるなどしてふるって応募して下さい。（以下略）

「母の歴史」募集に先立って、婦人部は学習パンフレット『お母さんの生活の中から』（1953年6月16日）を作成し、『人間の歴史3』を抜粋して

紹介し「人間らしい生活をするために書こう」と呼びかけた。文集『母の歴史』は1953（昭和28）年12月に完成し（活版刷り）、追加分がガリ版文集で別途作成された。活版は女性37人、ガリ版刷りは女性25人・男性1人が執筆している。

『私の家』（1952年6月）以降、文集に生活綴方が掲載されたのは134人（うち男性10）にのぼる。仮名（ペンネーム）や他工場の若干名を考慮しても、少なくとも百十数人が泊工場で生活綴方の活動に参加したことがわかる。これは1953年末の従業員数1,404人の約一割にあたる。にもかかわらず労組運動方針に生活綴方が盛り込まれたのは、その積極的なメンバーが複数労組役員の位置についたからだが、これは寮問題を通じて生活綴方のメンバーが皆の信頼を一定程度獲得していたことを示している。このようにして泊工場内では生活綴方に対する多数の支持が広がっていったのであった。

おわりに

この後、このサークルの生活綴方の活動は会社からも労組幹部からも批判されるようになる。解雇された澤井は会社との裁判を闘い、支援する仲間が有志のサークル「生活を記録する会」を発足させる（1955年初頭）。それは20人ほどの仲間の強い結束を基盤とし、工場外に向けて文集『なかまたち』を、サークル内機関紙として『書くこと』などを作成していく。そこには職場の配置転換と「説教」の詳細な記録が記された。同時に、仲間どうしの恋愛を契機とする危機にサークルが直面するが、それも書くことを通じて乗り越えようと試みられた。1950年代後半になると「適齢期」や結婚が大きな問題となり、悩みや迷い、葛藤が綴られてゆく。こうしたその後の展開も視野に入れば記録は多面的な相貌を見せる。「山びこ学校」を模倣した初期の綴方、寮問題解決の過程で書かれた日録や主張、母への割り切れない思いの吐露、「圧迫」下での陳述的な記録、人生の岐路での逡巡を綴った対話や座談の形式、操短による一時解雇期間の手紙による通信など多彩である。また文集や機関紙と並行して複数の表現の場を持ち（日記・交換日記・共同日記・グループノート、学習資料・チラシ・ビラ・壁新聞・通信など）、ガリ版という発信媒体が自在に活用されて自前の小さな言論空間が生み出されてもいた。文集制作（編集、校正、カットや版画、ガリ切り、印刷製本、発送）の共同作業もまた実践共同体の様相を創出した。

「生活を記録する会」については、「パターンナリズム

⁶⁵ 『第8回年次大会報告書・議案書』東亜紡織労働組合泊支部、1953年4月25日。

⁶⁶ 「母」に象徴されるここでの問題認識をどのように読むかは、このサークルのその後の生活綴方ともあわせて別途検討する。

ム」⁶⁷、「女子ども」カテゴリーへの回収⁶⁸、「女子ども」の内面化⁶⁹との指摘がなされている。本稿はこれらに直接応えるものではないが、これら論点は労働組合や寮自治会の日常的な活動などを含むサークル活動の実践とともに検討される必要があると考える。当該実践固有の文脈と歴史的社会的文脈、具体的には1950年代という時代と当時の日本農村における女性をめぐる問題、女性たちの社会運動、繊維産業女性労働者の生活と労働の実態を突き合わせ、同時に書くことと記録の意味、とりわけ必ずしも記録化されなかった格闘と多様な「抵抗」の仕方を視野に入れ全体的に検討することで、生活記録実践が含み持つ問題と可能性とが探究されうる。他に生活記録運動の担い手の多数が女性だったことをどのように見るかという指摘や、集団的記録実践におけるサークル（集団）と記録の関係にかかわる問題、とりわけ「共同で書く」ことの意味（解放／抑圧の両側面を視野に）をどう考えるかといった提起もなされた⁷⁰。生活綴方・生活記録の書字ないし表現様式の基本的性質の観点からの考察も含め、残された課題に対する詳述は別途機会を得たい。

⁶⁷ 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』青弓社、2013年（「第5章「私」を綴る「人びと」」）。

⁶⁸ 杉本星子「鶴見和子と製糸・紡績で働いた「三代の女」たち」西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録に学ぶ』日本図書センター、2009年。

⁶⁹ 鳥羽耕史『1950年代 「記録」の時代』河出書房新社、2010年、43-44頁。

⁷⁰ 戦後文化運動合同研究会第1セッション討議より。

図表1 労組機関誌『わかくさ』表紙絵



図表2 写真（寮生活・労働組合）



「学園」の教室風景（1951年）



運動会



四日市統一メーデーに参加

図表 3 従業員数の推移

(1) 従業員数の推移

(人)

年月日	総数	女性 (%)	寄宿舍居住 (%)	寄宿女性 (%)
1953 年 12 月 20 日	1,404	1,072 (76.4%)	866 (61.7%)	755 (70.4%/87.2%)
1954 年 6 月 20 日	1,343	1,008 (75.1%)	803 (59.8%)	698 (69.2%/86.9%)
1954 年 12 月 20 日	1,259	935 (74.3%)	725 (57.6%)	633 (67.7%/87.3%)
1955 年 6 月 20 日	1,144	833 (72.8%)	611 (53.4%)	530 (63.6%/86.7%)
1955 年 12 月 20 日	1,104	797 (72.2%)	574 (52.0%)	498 (62.5%/86.8%)
1956 年 7 月 1 日	1,056	745 (70.5%)	497 (47.1%)	452 (60.7%/90.9%)
1957 年 1 月 1 日	998	696 (69.7%)	458 (45.9%)	418 (60.1%/91.3%)
1957 年 7 月 1 日	941	644 (68.4%)	406 (43.1%)	374 (58.1%/92.1%)
1958 年 1 月 20 日	888	603 (67.9%)	362 (40.8%)	336 (55.7%/92.8%)
1958 年 8 月 20 日	750	481 (64.1%)	290 (38.7%)	272 (56.5%/93.8%)

※『泊工場新聞』より集計して作成 (辻智子)。(%) は、女性・寄宿は総数に対して、寄宿女性は女性／寄宿舍居住者に対する割合。1956 年 2 月 1 日号に「今月より休職者を在籍者に加えた (17 人)」とある。

(2) 退社人数の推移

(人)

期間	退社人数	理由「結婚」「結婚準備」※1 (%)
1953 年度	104	24 (23.1%)
1954 年 2 月 20 日～12 月 20 日	89	33 (37.1%)
1955 年 1 月 20 日～12 月 20 日	107	34 (31.8%)
1956 年 1 月 20 日～12 月 1 日	99	45 (45.5%)
1957 年 1 月 1 日～12 月 20 日	113	74 (65.5%)
1958 年 1 月 20 日～9 月 20 日 ※2	136	81 (59.6%)
1959 年 4 月 1 日～11 月 1 日 ※3	57	29 (50.9%)
1960 年 2 月～12 月 1 日 ※4	76	50 (65.8%)

※『泊工場新聞』に記載された動向を集計して作成 (辻智子)。

※1 理由の記載があった場合のみ集計。(%) は退社人数に占める「結婚」「結婚準備」退社の割合。

※2 10-12 月の記載なし。この年 2 月に操短による指名解雇 118 名 (男 12、女 106) が行われている。

※3 1-3 月の記載なし。12 月は欠号。

※4 1、6 月は欠号。

参考資料 繊維産業労働組合の文化活動（1950 年前後～1960 年）

年	各労組の文化活動：機関誌発行の動向を中心に	関連する全国組織・社会の動向
1949	大日本紡本部『絨光』、日清紡本部『労苑』、東洋レーヨン滋賀『労鐘』、三菱縫製『スクラム』、日東紡新潟『■ぐみ』、東亜紡泊『若草』、大建紡豊科『山鳩』、富士紡小山『小山労働月報』、東レ滋賀自治会『明窓』、大和毛織『大和』、福助足袋『あゆみ』、富士紡本部『富士の友』、東亜紡浦和『ホープ』、日本毛織加印『衆望』、東洋伊丹『オールウェーブ』、日本針布『スクラム』、日紡貝塚『曙』、東洋紡忠岡『ほゝえみ』、東洋紡赤穂『みちしお』、東洋紡二見『みどり』、東洋紡三本松紙『うみなり』、東洋紡大山『いしずえ』、東亜紡楠『紡響』、日本フェルト『さけび』、日紡東京『箴の音』、大建本部『労影』、日毛加印『書記局ニュース』、東洋紡『くみあい』、大和紡佐賀『綿塵』（情報出所『全織新聞』1949年5月15日号。以下、新聞と表記。）	『全織新聞』特集「文化と労働組合」（5.15）。全国労働者文化会議（労文）結成大会（10.28）。
1950	三越縫製で演劇活動（新聞 50.4.15「期待される職場演劇」より）。日清紡文教委員会講演会「労組と文化教育活動について」（「来年度は多いに力を入れたい」と発言）。大和毛織南千住で第一回労働文化祭（演劇、ダンス）開催。日本フェルトで演劇大会開催。東亜紡泊で文化部が文化サークル結成を呼びかけ（文学・演劇・音楽・映画サークル結成）。	日本労働組合総評議会（総評）結成大会（7.11）、全国蚕糸労働組合連合会（全蚕糸労連）が総評に加盟（7月）。この年、企業のレッドパージ。
1951	呉羽紡績が佐多稲子を呼び各地の工場を巡回。鐘紡南千住『狼火』4号（新聞 51.2.26）。日東紡新潟寄宿自治会『つどい』11号（新聞 51.12.26）。東京麻糸沼津『あんでな』（新聞 51.3.26）。東亜紡泊『わかくさ』11号（新聞 51.3.26）。日本フェルト王子『さけび』（新聞 51.4.2）。小泉製麻女寄自治会『さざなみ』（新聞 51.4.2）。東京麻糸で文化祭（新聞 51.4.30「競い合う熱演」）。富士紡小山『労峰』26号（新聞 51.4.30）、27号（新聞 51.6.18）。日毛彌富『躍動』創立5周年記念号（新聞 51.4.30）。日紡貝塚『曙』（新聞 51.4.30）。日清紡針崎で文化サークルの自主的活動を進める計画。大日本紡垂井機関紙『仰嶺』（新聞 51.5.14）。日紡東京製絨『…』7号（新聞 51.5.14）。日毛加印『衆望』15号（新聞 51.5.21）、17号（11.12）。鐘紡住道工場男女寄宿舎自治会『斧』7号（新聞 51.6.25）。日毛中山『欣び』6号（新聞 51.7.2）、7号（51.9.3）。鐘紡彦根自治会『湖畔』（新聞 51.9.10）、10月号（10.29）、11月号（12.17）。東洋帆布『東帆文明』4号（新聞 51.9.10）。日清紡『労苑』（新聞 51.11.12）。東亜紡楠「三百人のコーラス団」・米倉良子「竹の子会」が労働省「働く少年少女の生活記録」に入選（新聞 51.11.12）。東洋レーヨン滋賀『労鐘』（新聞 51.11.19）。東洋紡『つどい』9号（新聞 51.11.19）。東レ滋賀自治会『明窓』10号（新聞 51.12.17）。東亜紡泊で文学サークルが文集『あゆみ』発行、『山びこ学校』を読み生活綴方に関心。	全織新聞に「組合の文化活動はどうしてやるか」（1.15）、「組合文化運動の方向」（4.21）。全織同盟が総評に加盟（全蚕糸労連は全織加盟生糸部会となる）。総評、第二回大会開催、平和四原則表明。社会党臨時大会で左右に分裂（10.24）。繊維労働組合連絡協議会（織労協）結成し日常活動・経験交流・労働条件調査を計画（全蚕労連、鐘紡、呉羽、小泉製麻、帝国製麻、京都合同繊維労組、全羊労連泉州労連等が構成）。
1952	東洋繊維彦根『組合タイムス』9（新聞 52.1.19）。東京麻糸女子寄宿舎自治会『土筆』創刊号（新聞 52.3.1）。鐘紡彦根自治会『湖畔』新年号（新聞 52.3.1）、晩秋号（…）。日毛中山『欣び』8号（新聞 52.3.29）、10号（新聞 8.30）。呉羽紡『わたぐも』創刊号（新聞 52.4.5）。『呉羽文化』創刊（新聞 52.5.28）。富士紡小山『労峰』31号（新聞 52.4.12）、32号（7.12）、34号（…）。東洋繊維労組連『織友』（新聞 52.4.26）。日紡東京製絨『いつみ』13号（新聞 52.4.26）、日毛加印『衆望』19号（新聞 52.5.31）、20号（新聞 52.5.9）。東洋紡岩国『いわくに』創刊号（新聞 52.5.10）。第日紡大垣『あゆみ』春季号（新聞 52.5.17）。帝人三	全織同盟、機関紙コンクール受賞誌決定（新聞 52.1.12）、「民主的な民間労組の再編運動」を提唱、「新しき知性の芽生え」（東亜紡泊文学サークルの生活綴方運動「私の家」批評）（新聞 52.8.30）。海員組合・全映演・日放労とともに総評の指導方針批判（12.26）。この年、対

	原男女寄宿舎自治会『寮友・寮苑』併刊7号。東亜紡泊で「労文山びこ学校」開催、文学サークル生活綴方集『私の家』(6月)。	日平和・日米安保条約発効(4.28)、血のメーデー事件(5.1)。
1953	呉羽紡績、詩集『機械のなかの青春』発行(4.10)。『明日のある娘ら』編集始まる(呉羽・東亜・東洋紡・倉紡・全蚕糸が中心に9月6日、編集会議)。東亜紡泊婦人部文集『私のおかあさん』、労組文集『母の歴史』、文学サークル文集『たて糸よこ糸』1号(53年末頃から会社による生活綴方批判始まる)。	全織同盟、婦人部が婦人週間記念生活綴方募集(織新聞53.3.8)・当選発表(7.4)、総評批判の四単産中心に全国民主主義労働運動連絡協議会(民労連)結成(2月)、臨時大会で総評脱退決定(11.14)。全蚕糸労連が全織同盟脱退(7月)。この年、総選挙で左派社会党躍進(4月)。
1954	繊維労働組合生活綴方編集委員会編『明日のある娘ら』(三一書房)刊行(2月)。日清紡績で巡回美術展、短歌・俳句コンクール、機関誌紙上で紙上作文コンクール実施。倉敷紡績枚方支部文教部『よど』第8号(3月)。日清紡『労苑』27号(新聞54.4.24)。倉敷レーヨン西条男女寄宿舎自治会『大空』(新聞54.5.1)。東洋紡姫路『さきがけ』13号(新聞54.5.15)。他会社の労組応援、労働者・市民も自主的に応援活動展開。倉敷紡績枚方支部文教部『よど』第9号(9.10)。日紡垂井男女寄宿舎自治会『自治の友』(新聞54.10.2)。帝産佐野「働く人の作品展」開催(新聞54.10.9)。鐘紡松本、職場コーラス活動(新聞54.10.9)。日紡垂井、演劇研究会活動(新聞54.10.9)。日毛彌富、どんぐりクラブ活動(新聞54.10.16)。中央紡績で文化祭(新聞54.10.16)。倉紡丸亀で文化祭(新聞54.10.16)。近江絹糸で機関紙創刊(新聞54.10.16)。敷紡城北で放送劇(新聞54.10.23)。呉羽紡豊科でサワラビ研究会(サークル活動をどうすすめていくか、新聞54.10.23)。西日本紡績荒木支部文化部『しゅう』(新聞54.11.13)。東亜紡泊で講演会(名古屋大教授・下信一氏)(新聞54.11.20)。東亜紡楠『つむぎ』2号(新聞54.11.20)。帯谷織布『あゆみ』秋季号(新聞54.11.27)。日紡垂井、38名会員で生活綴方の会(新聞54.12.4)。東洋紡山田支部『青嶺』第11号(12.10)。近江絹糸『解放のうたよ高らかに』刊行(労組教育部・全織教宣部12月)。東亜紡泊で会社から生活綴方への批判高まる、近江絹糸争議応援記録作成、有志サークル「生活を記録する会」文集『たて糸よこ糸』2号・『なかまたち』発行、『母の歴史』刊行。	全織同盟、海員組合・全映演らと全日本労働組合会議(全労会議)結成(4.22-23)、近江絹糸「人権争議」(6月2日～9月17日)で「人権闘争」手記を募集(新聞54.10.23)。総評、組織強化として「映画・文化サークル、文化事業を盛んに」(運動方針案54.7.2)。この年、第五福竜丸ビキニ水爆実験で被爆(3.1)、周恩来・ネルー共同宣言「平和五原則」(6.28)、自衛隊法公布、自衛隊発足(7.1)。『婦人公論』に佐多稲子「機械の中の青春」連載(5月～)。
1955	日清紡績島田工場で演劇等文化活動始まる。日紡貝塚『あけぼの』(新聞55.1.5)。倉紡丸亀『やまびこ』7号(新聞55.2.5)。近江絹糸教育文化部『生活記録の書き方』(3.26)。日東紡教宣部、生活綴方集『生活の中から』(昨年度の婦対委にて申し合わせ作品募集、一部「生活の中から」・二部「母」)(新聞55.3.26)。栃尾繊維従業員労組『機ばの灯』(新聞55.4.2)。鐘紡淀川工場いがぐり会『いがぐり』No.2(6月)。全旭連でサークル小冊子『綴方教室』3号発行→新しいものも加えて単行本『真実の記』にまとめ刊行(新聞55.6.25,7.30)。倉敷紡績文教部『よど』No.10(7.1)。近江絹糸大垣支部教育文化部つくしクラブ『ほのお』第7号(8.20)。近江絹糸津支部教育文化部編『ほほずえ』(サークル合同機関誌)発行(8.20)。呉羽紡大阪で女子中心に学習サークル「どんぐりくらぶ」誕生、日本女性史などを勉強(新聞55.9.3)。東亜紡で文化祭オール東亜・演劇盛	全織同盟、婦人週間にちなんで作文募集(新聞3.19)、運動方針に教育文化活動の重要性を指摘、「文化活動方針」発表(新聞55.8.27、9.10、9.17)、「私の生活記録」募集(60編応募)・選評(新聞10.29)→以後紙上に掲載(56.1.2まで)、紙上討論「サークル活動について」(『全織新聞』55.10.29,11.12,11.25)、全国勤労者文化協会(全文協)設立に積極的に協力(11.21設立総会)。

42 紡績女子労働者の生活記録運動

	<p>ん（新聞 55.9.3）。敷紡笹津支部で綴方サークル「やつでグループ」、日頃思っていることを綴って文集『らくがき』（新聞 55.9.10）。近江絹糸大垣支部むぎめし会『むぎめし』3号（9.21）。日紡大垣文芸サークルが生活綴方について研究中（月1回定例会）、国分一太郎氏を招く（新聞 55.9.24）。近江絹糸教文部長会議「書く運動（らくがき帳）」提唱（10月）、『らくがき』編集委員会発足（各支部1名、本部2名）、各支部の活動経験を交流（11.5）。東洋紡が全織同盟脱退（11.22臨時大会、57年2月に復帰）。全旭連『いもじる』（新聞 55.12.10）。近江絹糸彦根教文部文集『らくがき』No.1（12.12）。東洋紡春木『たたかいの中に』（12.30）（10月11日～11月31日までのストライキ作文集）。東亜紡泊「生活を記録する会」文集『なかまたち』発行（会社からの生活綴方批判がつづくなか工場の外の人びとと交流を始める）。</p>	<p>総評、「全国軍事基地反対闘争連絡会議」（6.23-24）、職場の学習運動と文化サークル組織化強調（国民文化会議など）（55年度運動方針）。この年、日本共産党、『アカハタ』に極左冒険主義批判（1.1）、日本生産性本部設立（2.14）、産業別統一賃上げ闘争「春闘」始まる。佐多稲子『機械の中の青春』刊行（角川書店）（10月）。</p>
1956	<p>呉羽紡績『労影』（1.1）（文化祭特集号）。近江絹糸津支部サークル報告「めざましい成長ぶり」（新聞 56.1.1）。近江絹糸文教部編『らくがき』発行、「らくがき帖運動」評判（新聞 4.25）。三菱レーヨン幸田寄宿舎自治会文学サークル誕生、機関誌『高嶺』10号（『友愛』108）。敷紡安城寄宿舎対策部中心に『暮らしの作文集』編集（新聞 56.1.25）。敷紡、綴方・短歌・俳句などの作品集『勤労文集』発行（新聞 56.4.21）。大東紡教宣部、2年前からの「生活を綴ろう」運動で第2回目の文集発行（80作品うち25を掲載、新聞 56.4.21）。全織同盟一の宮地区文化祭開催（新聞 56.8.18）。日清紡績教宣委で組合意識を高める「書きやすくさせる運動」「一般の声を集約する活動」を議論。針崎・美合工場で文化活動活発化。近江絹糸と呉羽紡が職場交流（新聞 56.7.21）。大同毛織稲沢教文部『生活綴方集』第五集（8.10）。呉羽紡文教部『呉羽サークル』No.15（総評方針紹介）（8.31）。大同毛織稲沢友達会『生活綴方集』第六集（12.21）。東亜紡『とうあ』3（友愛 108）。倉敷レーヨン男女寄宿舎自治会『倉レ寮友』（友愛 108）。大日織維工業十周年記念誌『あしあと』（友愛 108）。日本フェルト王子：『さけび』40（友愛 108）。日毛中山：『欣び』22号（友愛 108）。</p>	<p>全織同盟、「全文協・各種コンクール」（新聞 56.1.21）→映画・写真・新聞・出版・音楽・舞踊・文学専門分科会設置、「私の生活記録」連載（以降、継続）（新聞 56.1.25）、「第1回若人の集いー全織教宣・青婦全国代表のつどい」サークル発表（3.3-4）、サークルと組合の調整が課題に、生活記録募集、過去十年のあゆみの総決算として寄宿舎問題についての生活記録集発行予定（新聞 56.3.31）、紙上文化講座連載（新聞 56.10.6～）（コーラス、人形劇、朗読会、話し合い、弁論、演劇、漫画、生活綴方など）。総評、教育文化活動の強化の一つ「生活綴り方やルポルタージュ運動を推進する」の文言（56年度運動方針）。この頃、新協劇団「機械の中の青春」を演劇化、全国上映。</p>

1957	<p>日清紡績西新井工場サークル活動育成方針、島田工場4自主サークル誕生、針崎工場で地区サークル発表会へ参加、『労苑』39号（友愛118）。日毛加印『衆望』32号（友愛110）、33号（友愛117）。近江絹糸『…』2号（友愛110）。日東紡富久山『らくがき』（友愛110）。西日本紡荒木『しゅろ』36号（友愛110）。呉羽紡1956文化祭作品集『呉羽文化』（友愛110）。日本フェルト王子『さけび』41号（友愛111）、43号（友愛117）。小泉製麻男女寄宿舎自治会『三峰』2号（友愛111）、3号（友愛113）。福助足袋労組連『あゆみ』79号（友愛111）。中央紡績『玲瓏』10号（友愛111）。愛知紡『つどい』7号（友愛112）。興和紡倉吉『樹木』11号（友愛112）、『樹木』12号（友愛117）。大日織維『若人』4号（友愛112）。日本レーヨン労組連創立十周年記念特集号『全日レ』（友愛112）。近藤紡績津島『ひろば』1号（友愛112）。帝人三原『広場』2号（友愛112）。大日紡垂井『自治之友』14号（友愛112）。倉レ西条男女寄宿舎自治会『大空』3月号（友愛113）、日本アセテート労組教宣部『明るい歩み』7号（友愛113）。鐘紡南千住『のろし』20号（友愛113）、全旭連青婦部『こだま』（友愛113）。日毛加印「友愛」友の会『友の雑草』1号（友愛113）。日レ宇治清和寮自治会『自治』（友愛116）。東邦レーヨン自治会『あおぎり』4号（友愛116）。鐘紡長浜陸峯寮自治会『むつみ』3号（友愛116）。東亜紡労組『とうあ』4号（友愛119）。三菱レイヨン幸田自治会『高嶺』12号（友愛119）。</p>	<p>＜全織＞昨春の生活記録募集、「該当作ないため作品集発行は見合わせる」（新聞57.2.2.）教宣青婦全国代表の集い（3.2-4）、労働時間短縮争議（春～夏）</p>
1958	<p>岡山地方繊維『ちせんおかやま』1号（友愛123）。東洋紡敦賀『ななかま』（友愛123）。富士紡大分『労想』26号（友愛123）、28号（友愛131）。日毛加印『衆望』35号（友愛123）、36号（友愛129）。福助足袋労組連『あゆみ』89号（友愛124）。大日紡垂井『自治之友』17号（友愛124）、18号（友愛129）。倉レ西条男女寄宿舎自治会『大空』3月号（友愛124）、7月号（友愛128）、11月号（友愛132）。興和紡倉吉『樹木』13号（友愛124）、15号（友愛132）。日清紡教宣委員会「サークル活動の指針」作成、西新井→サークル活動具体化、浜松→サークル活動活発化に重点方針。鐘紡文芸教室発足。創作・生活綴方・詩・短歌・俳句などの作品を専門家にみてもらう（新聞58.7.12）、生活綴方文集『生活の中から』（友愛127）。大同毛織稲沢ともだち会、作文集『土曜日』第12集（23編）（新聞58.9.13・友愛130）、『わたしの職場』11号（友愛128）。興和紡『こうわ』（友愛125）。三菱レイヨン幸田工場自治会『高嶺』13号（友愛125）、14号（友愛131）。中央紡績『玲瓏』11号（友愛125）。鐘紡南千住『のろし』21号（友愛125）。近江絹糸富士宮『雄峯』（友愛126）、『夜あけ』14号（友愛133）。日本フェルト王子『さけび』5月号（友愛126）、47号（友愛127）、48号（友愛129）。小泉製麻男女寄宿舎自治会『三峰』3月号（友愛126）、5月号（友愛127）、9月号（友愛131）、10月号（友愛132）、12月号（友愛133）。平仙レース文芸クラブ『雑草』3月号（友愛126）。東邦レーヨン自治会『あおぎり』6号（友愛127）。東洋紡三重『ゆうなぎ』8号（友愛127）、9号（友愛132）。愛知紡『つどい』11号（友愛127）。呉羽紡大町『わた雲』15号（友愛127）。和興紡績自治会『紫苑』1号（友愛127）。興和紡『あすなろ』1号（友愛127）。敷島紡績『勤労文集』2号（友愛127）。東洋紡三重製絨10周年記念号『すずか』（友愛127）。日本レーヨン岡崎工場男子寄宿舎『ともしび』11号（友愛127）。東織男女寄宿舎協議会『みちしるべ』3号（友愛127）、4号（友愛130）、5号（友愛132）。大日本紡貝塚『あけぼの』6月号（友愛128）、9月号（友愛131）。</p>	<p>全織同盟、紙上文化講座（生活記録）（新聞58.1.1）、運動方針の教育活動で各種サークルの充実明記。総評、文化活動とサークルと組合活動の関係について討論深化（『総評はかく闘う』58年版）。この年、日教組、勤評闘争（10.28～）。</p>

44 紡績女子労働者の生活記録運動

	大日本紡『日紡文芸』1号(友愛129)。倉敷紡安城『あんじょう』1号(友愛129)。敷紡『くらしのうた』第二集(友愛129)。鐘紡新町若草会『若草』33号(友愛130)。千葉漁網文芸同好会『さざ波』2号(友愛130)。日毛中山『欣び』26号(友愛131)。福助商事大阪支店『ほむら』(友愛131)。大垣紡績『いぶき』創刊号(友愛131)。日レ桐生工場自治会『はるな』10号(友愛132)。日清紡『労苑』43号(友愛133)。旭化成ダイナマイト『炬火』3号(友愛133)。	
1959	日清紡績、「サークル活動の指針」活用、活発化はかる。倉レ西条男女寄宿舎自治会『大空』1月号(友愛134)。敷紡笹津綴方サークルで自分たちの「らくがき」批判会(新聞59.3.25)。興和紡『あすなろ』2号(友愛134)。日本フェルト王子『さけび』1月号(友愛134)。福助足袋労組連『あゆみ』3号(友愛134)。日毛一宮『労声』8号(友愛135)。日毛加印『衆望』37号(友愛135)。大日紡垂井『自治之友』19号(友愛135)。帝国産業繊維岸一『叫び』1月号(友愛135)。蘇東興業『みつば』1号(友愛136)。富士紡大分『労想』29号(友愛136)。日毛中山『欣び』27号(友愛136)。東邦レーヨン自治会『あおぎり』7号(友愛136)。興和紡『こうわ』2号(友愛136)、『あすなろ』4号(友愛136)。大日繊維『協友』16号(友愛136)。倉レ『倉レ寮友』(友愛136)。三菱レイヨン幸田工場自治会『高嶺』15号(友愛138)。日レ桐生工場自治会『はるな』11号(友愛138)。鐘紡南千住『のろし』22号(友愛138)。帝産生活記録文集「ぼうせきのうた」作成中(新聞59.12.15)。東亜紡楠『つむぎ』6号(友愛138)。	全織同盟、全文協生活記録募集への入選・佳作作品を紹介(新聞59.1.1)、新聞500号記念生活記録募集に40編応募、審査「もっと生活のにおいを」と評す(新聞59.9.5)。総評、教育文化全国集会(150人)「大衆的な討論を通して幅広い労働者を結集」(3.30-31)、「組合員の学習並びにサークル活動および活動への自主的意欲的なものをどう発展させていくか」(定期大会報告.8.26-29)。この年、安保阻止国民会議結成(3.28)→安保闘争へ、三井炭坑三池争議(12.11～)。
1960	東洋紡で生活綴方・レクリエーションのグループ「みちくさ会」(友愛144)。新日本紡、話し合いサークル「ばかじゃない会」発足(新聞60.2.20)。大垣紡労組『いぶき』4号(友愛151)、5号(友愛155)。敷紡笹津・福井繊維合同労組梯、綴方サークル交流(新聞60.4.10,5.20)。大日紡垂井『自治之友』23号(友愛151)。東邦レーヨン自治会『あおぎり』10号(友愛151)。三菱レイヨン岐阜女子自治会『若鮎』18号(友愛151)、19号(友愛154)。日毛加印『衆望』39号(友愛152)。帝人岩国工場自治会『やまびこ』32号(友愛152)。東織三原浮城自治会『みちしるべ』2号(友愛152)。鐘紡南千住『のろし』23号(友愛152)。興和紡『あすなろ』8号(友愛153)。日清紡『労苑』48号(友愛153)。日本レーヨン岡崎工場男子寄宿舎『ともしび』14号(友愛153)。興和紡倉吉『樹木』19号(友愛153)。倉レ西条作文サークル「蝸牛」(昨春より活動)(新聞60.9.5)。小泉製麻男女寄自治会『三峰』8-9合併号(友愛154)、10月号(友愛155)。大日本紡大高『らんぷ』(友愛154)。三菱レイヨン幸田工場自治会『高嶺』17号(友愛155)。	全織同盟、民主社会党(民社党)結成大会(1.24)を支持、『友愛』誌上で募集していた「生活つづり方」を「職場とくらしのうた」とする(友愛148)、各組合から文芸(小説・戯曲・生活記録)の優秀作品を推薦してもらい、全織文芸年度賞等を付与。総評、中央労働者教育研究集会開催、160人参加(60.3.7-9)。この年、新安保条約・日米地位協定など調印(1.19)→国会で自民党単独強行採決(5.20)→安保改定阻止闘争激化(6.15)、新安保条約自然承認(6.19)、国民所得倍增計画が閣議決定(12.27)。

※各企業・組合年史および全織同盟刊行物(『全織新聞』『友愛』)より抽出(出所を末尾括弧で付した)。一部、現物にて確認。

■は読みとり不明箇所。(作成 辻智子)

(つじ ともこ・北海道大学)